

妖怪のいぶき



地質学者の関香は、しめ縄が張り巡らされた東北のとある洞窟の前に立って居た。

「先生そんな軽装で大丈夫なのですか？」

完全重装備な山岳ガイド山根が言った。

「真夏なのだから大丈夫に決まっているでしょ」香はあっさり応える。

日本最古の鍾乳洞と言われる此処には一般公開されていない場所がある。

それは水虎の隠れ家と称される永久凍土の洞窟。

昔獯猛な妖怪水虎を此処に追込み封印したとされていた。

中に入るとひんやり肌寒く夏とは思えない程の気温だった。

辺りは緑がかった壁面が光苔のように妖しい光を放っていた。

「やはり温暖化の影響かしら。洞窟内がかなり融けた感じだわ」

周囲を執拗に見回し香が呟く。

前屈みで地質を調べようとして「ヒャッ」と悲鳴をあげる。

「どうしました」

「えっ、背中に水滴が入っただけよ」

「そんな格好しているからですよ」

一通りの作業を終え研究室に戻った香はその晩から高熱を出し入院する事となった。

一週間が過ぎた頃、香の体に異質な...それも緑の鱗模様が現れた。

それは脊髄に沿って徐々に広がって行った。

原因が解らぬまま時間が過ぎ。

10日目には香の体はゼラチン状になり肉体は水となり果てた。

残ったものは限りなく透明な遺骸。

その脊髄には緑の生命体が蠢いていた。

これが、獯猛な妖怪水虎だとしたら...この先いったい...

そして、謎の奇病に関わった医師、看護師も同様の症状に見舞われた。

そう、連鎖的に...

科学技術が進歩したとはいえ、太古より人が踏み入ってはならない場所がある。

其処にあえて踏み込んでしまえば...

身をもって恐怖を知る事だろう。

愚かな人間達は...自ら自滅を招く

今回の妖怪：水虎（すいこ）は、中国や日本の水の妖怪。

## 第二夜 「願掛け」



岩手のある都市に踏鞴（たたら）で有名だった街がある。その昔男たちは鉄を得る為に必死で働いた。だが、結果病に倒れる者も多く居たと言われていた。その中で異質な病気に陥り亡くなった方々が居たらしい。そこで、悲しんだ家族が祠を建て祀ったという。其れは狭い路地に古民家が立ち並ぶなか。石畳を小高い丘に向かって歩くとあるのだが。

其処は、地元では有名な恋愛が成就するとされていた。

だが、それは一般の話し...

密やかに囁かれる噂によると、此処で願掛けするとどんな願いも絶対叶うと言われていた。

某知ってか知らずか何人かに一人は恋愛成就ではない願掛けを行う為に訪れていた。

今日も一人、真剣な面持ちをした高校生と思われる少女が祠の前に立ち尽くす。

「お願い私は死にたくないの...彼女達から私を守って」

悲痛な面持ちの少女が祠に願いを唱えると...辺りが暗くなり。

背後で「くくくっ」と笑い声が聞こえた。

振り向くと、其処には着物姿でから傘をかぶった10歳ぐらいの少年が佇んで居た。

傘で表情までは読み取る事は出来なかったが笑いの主はこの人物である事だけは理解出来た。

その少年は青白く光って居たのだ。

「わしの願いを叶えれば主の願いも叶えてやろう」そう言った少年はから傘を外す。

少女を見据えた眼は一つ目。

少女はヒィっと腰が引ける。

だが、気持ちは変わらないのか「貴方の願い？」と応える。

「ああ、お主の一つ目貰い受ける。それでどうじゃ」

「...解りました」少女の返答に一つ目の少年は頷き、少女の右目に手を据える。

クチュッと湿った音と共に眼球が零れ落ちる。

暗闇の中悲痛な叫びが響き渡る。

数日後少女は眼帯をして元気に高校へ登校する。

そんな中、少女の同級生数名が精神を病み不登校になった。

願い叶えり...主も眼掛けを試みては...

今回の妖怪：一つ目小僧（ひとつめこぞう）、目が一つだけある坊主頭の子供妖怪。

### 第三夜 「愛しさ」



北上川の近くに病気がちな若い男が住んで居た。天涯孤独だった為身の回り一切を自分でしていたのだが、ある日の早朝、何時もの様に朝食を作っていると台所の天井から小さな蜘蛛がツツツと降りて来た。

それに気付いた男は【朝蜘蛛は殺してはならない】との祖母の言葉に従い。

「そんな所に居ると焼け死ぬぞ」と呟きそっと蜘蛛の糸を掴み外へ逃がした。

その後数年が経ち男は以前より体調が悪くなり入院してしまう。痩せ細り視力は衰え快復の見込みはないものに思えた。

それでも男は何時も消灯前に訪れる看護師の優しさを支えに生きていた。

「○○さん、不自由な事はありませんか」

「ええ、貴女がよくしてくれるので助かっていますよ」男は優しい笑顔を見せた。

「いえ、私は何も...でもよかった」素敵な笑顔で応える。

目が見えないはずなのに、男は彼女を普通に眼で追い真剣な表情で呟いた。

「貴女に伝えたい事があります。もうすぐ僕は死ぬでしょう。その前に言ってしまうのですが、僕が普通の人間だったら告白していました」

「私も普通の人間なら貴方と共に生きてたでしょう...でも...私は...」

悲痛な面持ちの彼女に対し男は和らいだ表情をする。

「もういいですよ。僕は視力を失ってから、人とは別なモノが見えるようになりました。何となくですが...貴方は人ならざるものですよ」

男の言葉に彼女は悲しい表情で口を開いた。

「ご存知だったのですね。私は数年前に助けられた蜘蛛。貴方の御蔭で女郎蜘蛛の長になりこうして人間に変化する事も出来ました」

「やはりそうですか...それなら最後にお願ひがあります。このまま天涯孤独で死ぬより貴女の血肉になりたい。そして、貴女と共に...」

「そんな...」正体を知られた彼女の目から大粒の涙が溢れる。

数日後若者と看護師は病院から姿を消した。

今回の妖怪：女郎蜘蛛【絡新婦（じょろうぐも）】、美しい女性に化けるとされる妖怪。

## 第四夜 「捕獲！？」



岩手県遠野市。その駅から北東に20分程車を走らせた所に観光地で有名なカッパ淵が妖しくも静かに時を刻み続けていた。

土淵町の常堅寺裏に流れる小川は鬱蒼と茂った草木に覆われ、澄み切った水は木漏れ日を反射し心地良い音を奏でながら流れ落ちる。

伝説のカッパとはこんな大自然の中で生きていたのだろう。

小川のほとりには小さな祠があり、カッパの母子が鎮座していた。

その祠の前で静寂を掻き消すカップルの甲高い声が響いてきた。

「本当にこんな所に居るの」

「居るに決まってるって」

何の話しをしているかと思えば、赤ら顔で口の大きなカッパが居るかいないかと言い合いをしているようだ。

「そんな許可証まで買っちゃって」

「でもな、捕獲したら一千万だぜ」

どうやらこのカップルは、赤ら顔で口の大きな河童を捕獲する為。わざわざ観光協会でカッパ捕獲許可証を購入しこの有名な観光地でカッパ搜索をしているようだ。

「でも、何で私達が赤カッパを捕まえなきゃならないの...もし、居たとしてもどうするつもり？」

「だって気になるだろ。居たとしたら...」

「まあね。でも、わざわざ北上から来た私達純血種族の緑カッパには何の懸賞金も掛かってないのにさ...異種カッパが人気で懸賞金って、どうなのかしら」

東北の陸奥には、多くのカッパの種族が存在するらしい。

今回の妖怪：河童（かっぱ）、妖怪とも伝説上の動物とも言われる。UMA的な存在。



運動音痴な僕は小学時代、秋の運動会が大嫌いだった。

10月10日が近付くにつれ気持ちは落ち込み憂鬱な日々を過ごしていた。

ある日学校の帰り道、雑木林を抜け古い神社の横に差し掛かった時。

風化した石階段の所に綺麗な浴衣姿の女の子が目にとまる。年齢は僕と差ほど替わりないだろうか。

「ねえ、どうしてそんな暗い顔しているの」突然その娘に声を掛けられた僕は驚いた。

しっとりと澄んだ声。

学校の友達には居ないタイプ。

その彼女に何の疑いも躊躇もなく僕は応える。

「うん。もうすぐ運動会があるんだけど...嫌いなんだ。カケッコ苦手だしビリになるから、何時も雨が降ればいいって思ってた」

「ふ〜ん。なら君の願い叶えてあげよっか」

「えっ、本当」

「勿論。私は此処の神社の娘、探萌（さぐめ）よ。嘘は言わないわ。約束さえ守ってくれれば」

「僕、天野猛。どんな約束でもするからお願い」

探萌の約束とは、一生友達で居てくれだった。即座に承諾した。

結果運動会は雨で中止となり、その後探萌と友達になり神社でよく遊んだ。

ずっとずっと...

ぼろぼろで人気のない神社で...

あれから普通の人生を過ごして来た僕。

今更ながらあの頃を思い出す。

ピーッピーッと電子音が頭に響く。

薄れた意識の中、あの頃のままの探萌が病室内に居た。

僕はニッコリと笑って見せた...

「嘘つき。だから人間は嫌い...私の寿命と違いすぎっ」くるりと踵を返し立ち去ろうとした彼女の目に一粒の涙が光っていた。

僕の脳裏に先程見せた探萌の表情が焼き付き...電子音はゆっくりと消えていく。

外はそぼ降る雨。

探萌の涙と共に降り続く。

今回の妖怪：雨女、雨を呼び起こすことが出来る日本の女妖怪。



貴方に初めて会ったのはこんな土砂降りの雨の日だったよね。

私が軒下でずぶ濡れになりながら震えていた。

そんな時、そっと傘を差し出し優しい言葉をかけてくれた。

私は貴方の優しさに触れ、心温まり...

そして、貴方と暮らし始めた。

温かなご飯に暖かなベッド。

私達は1日1日を精一杯生きていたよね。

幸福な日々がずっと続くと想っていたよ。

けれど...いつの間にか貴方の匂いが変わっていた。

出会った頃は甘い金木犀の香りが心地良くて...

何時も貴方に甘えていたっけ。

それなのに...ごめんね、ごめんね。

気付くのが遅かったね。

貴方の口許から血が吐き出された時、どうしていいのか解らないまま...

思わずその血を舐め...拭った...

貴方は笑ってくれたね。

何時ものように...

でも、貴方はその場に倒れ冷たくなった。

私はそんな貴方の傍らで見つめ続けるしか出来なかった。

何時起きてくれるの？

何時笑いかけてくれるの？

骨となった貴方...貴方の血、肉を喰らい尽くした猫の私

私は貴方の理想の女性になれたのかな。

窓からほんの僅かな陽射し。

雨粒の陰影が貴方の白いモノをゆり起しているかのよう。

今回の妖怪：化け猫、長い年月生きた猫が人間に変化したと云われる。

また、主人を喰い殺した猫が化け猫になるともされる。

けど、槐はやっぱり猫が好き。

すみません。^°コm(\_ \_;)m三(m;\_ \_)m^°コ



遙か昔、ある村で生まれながらに赤毛で歯の生えた赤子が産まれた。

産婆は「鬼じゃ」と驚き腰を抜かす。

その噂は瞬く間に村中に知れ渡った。

それを聞いた村長は近し日に災難が降り注ぐ前兆ではないかと恐れ危ぶみ、

山ノ神に捧げよと提案する。

父親は懇願し、母親は泣き叫ぶも受け入れられず。

豪雨のさなか、長によりその赤子は山深い神が住し滝つぼへと投げ

入れられた。

儚い泣声は流れる轟音と飛沫でかき消された時...

天空に落雷が龍の如く這いずり...長を一飲みにした。

後にこの地域に鬼伝説が浸透した。

あれから、数百年。

代り映えのない風景、滝つぼの北東で岩がせり出し断崖絶壁な場所。

あの赤子が投げ入れられた所。

今現在鳥居が据えられ、

テレビの影響なのかパワースポットとして有名な場所になっていた。

過去に残虐な行為があったとも知らず。

人は過ちを犯す、何度も何度も...彼女もそうだった。

数週間前に自分の胎内より命をかき出した。

だが、後悔していた。自分の行為に...

彼女が滝つぼの白い飛沫を見詰めた時、赤毛の赤ん坊が見えた気がした。

その光景が自身の過ちを攻められているかのようで彼女は意識を失う。

崩れ落ちかけた刹那、疾風が舞い、彼女の腕が誰かの手により引き戻された。

意識の回復と同時に眼前に赤い髪の青年。

その腕の中に居る事に気づく。

「お前のような人間が此処に来るべきではない」

青年は彼女に冷たく言い放つ。

「なぜ」彼女は訳も解らずに言い返した。

「人でなしだから」そう言われ彼女は言葉をなくし再び意識を失う。

そして、夢を見た。

苦しみ抜き産んだばかりの赤ん坊には赤毛で歯が生えていた。

その赤ん坊を滝つぼに投げ入れる自分...

「嫌あ〜」



次に意識を取り戻した時、彼女は産婦人科の前に立ち尽して居た。  
お腹をさすると命の息吹が感じ取れた。  
そして、彼女はしっかりとした足取りで反対方向へと歩き出す。  
新たな命と共に...

今回の妖怪：天邪鬼、人の心を読み取り口真似などで人をからかう妖怪とされる。  
けれど、僕の視点で考えるとこのように人を好きではないが憎み切れてもいない。  
そんな妖怪が天邪鬼ではないかと...勝手な思い込みで書きました。



僕が彼女に初めて会ったのは接待の席だった。

それは、客とコンパニオンの関係性で終わるはずだったのだが。

それなのに...街で偶然素の彼女に会った時僕は恋に落ちてしまった。

夜の彼女はプロそのものだった。

島田鬣にお引摺り、詰袖の着物、踊り、三味線、どれをとっていても艶やかな彼女。

コンパニオンさんと言ったら「私は芸妓です」と一喝された事を思い出す。

そんな彼女に日の当たる場所で出会って半年...僕らは幸せな日々を送っていた。

ある日、学生時代の先輩に誘われキャバクラに行った。

そこで働くルナという娘にまたまた一目惚れ...

何度目かのデート中、彼女にばったり出くわした。

しかし、彼女は知らん顔で通り過ぎる...流石プロの芸妓。

が、部屋に戻った僕に彼女はこう言った。

「浮気するなら死ぬ気でおやりよ」

と...冷たい井戸の底から響いてくるような声で。

背中に冷たい汗が滴る。

その後ルナからの連絡は途絶えた。

まあ、僕も彼女の怖さを知ってから浮気はよそうと思ったからいいけれど。

そして数日が過ぎた頃、部屋で三味線の練習をする彼女。

「あれ、三味線新しくしたの」

「ええ、最近飛び切り上等な若い雌猫の皮が手に入ったものだから...フッフッ」

彼女は笑った...口が裂けんばかりに。

僕は、三味線に本物の猫皮を使っている事に少しぞっとした。

今回の妖怪：猫又、人間の女性に変化する猫又は三味線を奏でるという。

それは、同族を哀れんでの行動とされるが...

\*三味線はその昔雌の猫の皮を使っていた。



僕の母さんは昔やんちゃな人だった。  
けれど、父さんと出会ったお蔭で人生が変わったと言っていた。  
自分の生きて居る意味がどんなに重要で、  
尚且つこの日本の未来に関わっているかが解ったのだからと。  
その役割を果たす事が出来たのだから幸福な事よねとも。

そんな穏やかな顔をした母さんがそこに居た。

しかし、これは僕が産まれた時から決められていた儀式。  
両親の結婚と共に定められた事実。

...パチンツと音がした。

母さんの長かった髪がベッドの下に切り落とされた。

その髪の毛に目を向けていると氷が溶けるかのように消えた。

これが髪切りの儀式なのかと思った。

僕の目の前には両手が鋭い夕チバサミの形をした、

人間とは程遠い鳥を想わせる顔の子供...

いや、子供ぐらいの背丈な人ならざる者が僕を見て丁寧にお辞儀をしていた。

僕は軽く手を挙げる。

その行為に満足したのか人ならざる者はフツと消えた。

母さんは...最後になっこり笑った。

...僕の父さんは数万年生きた妖怪、母さんは妖怪の血を受け継ぐ人。

人と妖が結ばれる時、誓約が生じる。

それは、子供は生涯一人。

そして...その子が15歳になった時。

人の天寿をまっとうする。

それが今日。

僕のいのちと引き換えに母さんは逝った...

あっちの世界へと。

僕は母の命を糧に棘の未来を生きなければならない。

今回の妖怪：髪切り、どこからともなく現れ人に気づかれる事無く髪を切るとされる。

狐の仕業ではないかとも云われる。

そして、一説には髪を切られた人間は重い病に陥る。

また、人と幽霊が結婚しようとするとなれるとされる。  
こちらを元に僕のイメージで書きました。



陸奥国（むつのくに）に遠野と云われる場所あり。

そこには多くの民間伝承が遺されていた。

そして今でもそれらは多くの人々に信じられまた語り継がれてもいる。

秋深まりし日、観光地【南部曲り家】にあまり見慣れない人物が訪れた。

金髪に青い眼、健康そのものといった感じの外人女性。

彼女は目をキラキラ輝かせながら辺りを散策しデジカメにその景観を収めていた。

僕はその似つかわしくない光景を縁側に座ったまま眺めていた。

外人女性の一人旅とは珍しいものだと思いながら...

うっ、目が合ってしまった。どうする、知らん顔を決め込むか。

しかし彼女は僕の方へと歩み寄る。目前まで迫った彼女...

「失礼カモダケド、写真イカ」

に、日本語...助かった。

「あっ、大丈夫、大丈夫」

何が大丈夫なのか。

僕は手渡されたデジカメで曲り家をバックに彼女の思い出写真を撮る羽目に...

「ン？ドシタネ、旨ク撮レナイカ」

「ついてる...」

「エッ何、ゴミ？ナイヨ」

ゴミじゃないけどとは彼女には話さないでおいた。

その後、ほんの少しだが彼女と会話した...

僕は此処に住むモノ。

観光地に住んでるのかと彼女は驚き。

看板に現在も住人が居るので注意と読まなかった？

すると、話せるが読めないと。

そして、不幸続きの憂さ晴らしに好きな遠野物語の地を訪れたとも。

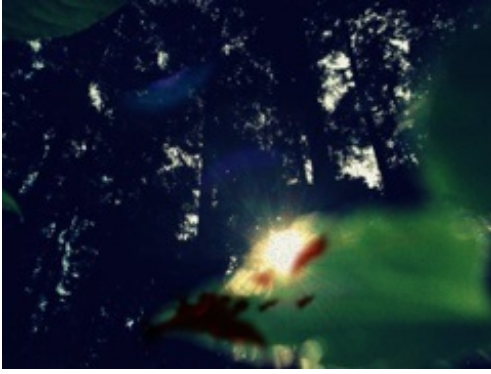
不幸続きか...そりゃあそうだ。

そんな彼女にお守りと言って瞳と同じ色の勾玉のペンダントをあげた。  
これで君は大丈夫と言って僕と彼女は二度と会う事のない別れを告げた。

あれから数か月、春まじかな遠野で茅葺屋根の上で仄かな日差しを僕は浴びていた。  
すると、あの時の外人の彼女が曲り家の住人にしきりに何かを訴えていた。  
聞けば、僕の事や不幸が治まった事などを話していた。  
安心したよ...君は幸せになったんだね。  
よかった、あの時憑いていた疫病神は居なくなったようだ。  
これで、本当に君とは二度と会えない。

だって不幸な君だからこそ僕に出会えた...

今回の妖怪：座敷わらし、人に幸福をもたらすとされている精霊的な妖怪。  
古い家の座敷や蔵に住み着くとされている。なお、人を選んで出現するとも...



とある田舎町に代々続く名家あり。

その家には町でも有名な程の美しい跡取り娘が一人居た。

娘は年頃となり婿養子を迎える事となったのだが。

その婿は近隣に住む美青年で、娘とは幼なじみのいところでもあった。

人々は二人の結婚を良縁と持て囃した。

しかし、二人の結婚後数年が過ぎようとしていたが子が出来

る様子が全くない事に不安を覚え。

あらゆる神仏に子が授かるよう願った。

それでも授かる気配がなく、最後の頼みとばかりに他化自在天に願掛けしたところ。

念願叶い、娘は懐妊したのだった。

それから、十月十日後...生まれ落ちた子は蛙の容姿。

娘は戦き泣き叫ぶ、婿は平然とした態度で赤子を片手で掴むと庭先へと消えた。

グキュ

そして、1年後。娘が再び産気付き、生まれた子はまたしても蛙のような子...

手は水掻きでもあるかのように指の間が塞がっていた。

ふふっふふっ...娘は笑い。赤子を抱き抱え庭先に消えた。

グシュ、ゴリ、グシュ、ゴリ

何かが飛び散り襖に赤い模様を作り出す。

「醜いのは嫌い」

「やはりダメなのか、俺達では」

「何を言うの兄様」

「し、知っていたのか...」

「ふふっ大好きな兄様、綺麗な兄様の事なら何でも...」

この夫婦は名家の生まれ。醜い者は嫌いのようだ。

そして月日が流れ名家に立派な跡取りが誕生した。

勿論無事に生まれた...優美で名家に相応しい男の子が。

そう僕がね。それと、醜い夫婦はもうこの世に居ない...僕の兄弟を手に掛けた罰でね。

グシュゴリ、グシュゴリ.....

ふふふっ。

今回の妖怪：該当なし、強いてあげるなら第6天魔王（他化自在天）。今回は民間伝承の一説を元に創作しましたが、これがもし本当の話なら怖い事です。けれど、閉鎖的な山里などでは近い事が行われていたと云われています。

## 第十二夜 「雪うさぎ」



兎は寂しいと死んでしまうと言われている。  
なら私も兎と一緒に寂しさのあまり死んでしまう。

小さな頃から疎まれ蔑まれ...それでも生きて来た。  
同種の人間に虐めにあいながらも...

けれど、冬の修学旅行で一変してしまう。

私は旅先の岩手で独り森へと続く古びた橋を渡っていた。  
いつの間にか雪が降り始め辺りを白く染めあげる。

耳鳴りがする程静寂につつまれた頃、森の奥の木々が軋みはじめた。  
構わず先に進むと耳鳴りが酷くなり意識が遠退く...軽い目眩に襲われた時。  
眼前に立派な門構えの屋敷が現れた。

観光地なのだから不思議に思う事なく中へ入った私が目にしたのは庭に咲き乱れる色とりどりの華...  
冬なのに。

理解出来ないまま、屋敷内に足を踏み入ると囲炉裏には沸いたばかりのお湯。  
キッチンと思われる場所には豪華な食器類。

此処はいったい...

けれど、凄く落ち着く。心から楽になれた。

どれぐらいそこに居たのか解らなくなった頃。  
元の橋に佇む私が居た。

雪も大分積もったようだ...  
ふと、辺りの雪を集め雪兎を造ってみた。  
目となる南天の実があれば完成なのにと思っていると彼女が現れた。

私を虐めているリーダーの彼女...含み笑いをする彼女。嫌いな彼女。  
目が合った瞬間、右手に何か冷たくて重い物の感触。



それを私はなぜか強く握りしめた。

グシャ

冷たくなった彼女。

ふふっ雪兔には綺麗な目ができた。

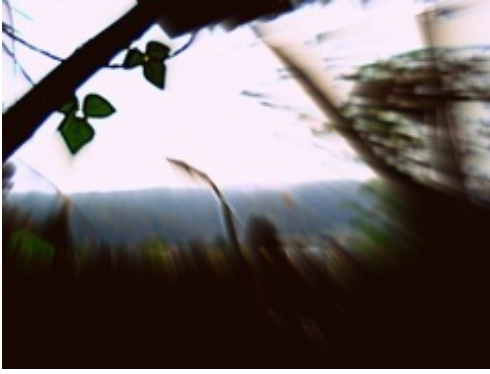
私はあの屋敷に何か忘れてきたようだ。

だって今の私は...笑っている。

今回の妖怪：マヨイガ、迷い人が辿り着く山奥深くにある屋敷の妖怪。

しかし、迷い込んだ人に幸福を与えらるる。

今回の彼女に起きた出来事は幸福な事なのか否か...



僅かばかり昔、東の地にとある風習があった。  
みすぼらしい姿の若い男が、同様な身なりの老婆を背にし、  
どんよりした空模様の山間部の坂道をとぼとぼと歩いて居た。  
ふと来た道を振り返る男の目に映った光景、それは収穫を終えたばかりの田畑。  
遠くでは藁を燃やしているのだろう、白い煙が狼煙の如く淀

んだ空に立ち上っていた。

ふうっとため息をついた男は「すまない」と誰にともなく呟くと再び坂道を登り始めた。  
飢餓が長く続いた時代...特定の年齢を超えた者を山へ置き去る風習。  
互いに何を思い山へ赴いたのか...

背中に重くのしかかる温もり、深く刻まれた皺のある口元から漏れた言葉は「気にする事はねえ、シキタリだで」しわがれた声ではあったが、覚悟を決めた意思が伝わってきた。  
男はその言葉を聞いた刹那涙が零れる。

そして、無言のまま歩き続けていると何時しか雪が降り始め背中の温もりも感じ取れなくなっていた。

「おっ母...」男は老婆へと顔を向ける。  
目にしたのは母とは似ても似つかない程恐ろしい形相の老女だった...  
うすよごれた老女の口元が男の首筋を捕らえる。  
プツんと皮膚が裂かれ真っ赤な血が宙を舞う。  
男はゆっくりと崩れ落ち、老女は覆い被さるように首筋に再び食らい付く。

「若い肉は生がいい、お前の母は煮込んでから食ってやるから安心しろ、あの世で仲良く暮らせ...ひひっ、ひっひっひ」

グシュ...クツチュ、くっちゃくっちゃ...

今回の妖怪：山姥、山姥は山奥に棲む老婆の姿をした妖怪。山中に迷い込んだ旅人などにはじめは美しい女性の姿で現れ、気を許し寝いったところを取って食うと云う。また、飢餓の時期に口減らしらしの為山に捨てられた老婆などの伝承が姿を変えたもの、姥捨て伝説の副産物とも云われる。また、飢餓状態に陥った人々が亡くなった人間の肉を食らったという逸話もあるとか...



彼女は春真っ盛りな季節に生まれた。  
名前は春...在り来りだが私は気に入っていた。  
そして私は春の傍に何時も居た。  
ある日春にこう言われた「あんた名前は」と...私が無言のままいると、春は私が名前をつけてあげると言った。  
自分の名前が春だから、あなたはうららねと...安易な発想をサラっ  
と言った。  
けれど、意外にも気に入ってしまったのだ。

そして、数十年を経た今も片時も春の傍を離れる事なくゆっくり時が過ぎていった。

彼女は年齢のせいか病で昏睡状態に陥っていた。

布団に横たわる春...直視出来なくて瞼を閉じた。

こんな感情初めてだ。

春との数十年間の思い出が雪解け水のように溢れ出す。

再び瞼を開けた時、春は私を見詰めニコッと笑い「あなたは相変わらずね、羨ましいわ。あなたが男だったら惚れてたかも...今までありがとう。そして、幸福だったわあなたに出会えて...」そう言い終えると静かに目を閉じた。

目尻には一滴の涙が光っていた。

人の死とは何度経験しても嫌なものだ。けれど、春。

私は男だよ...人間ではないけれど...

そんな天然な君が...

今回の妖怪：座敷わらし、古い家に住み着く精霊的な存在の妖怪。男女両方の目撃談があるが有名なのは女の子の姿だろうか。住み着いた家には幸運が訪れるとされる。

今回は僕の個人的な人が亡くなった時の感情を盛り込んでみました。



小さな頃から、デクノボウとかウドノタイボクと言われ続けた。

そのたびに母に泣き付いていた。

母は男の子は泣かないものよと言った。

それでも、溢れ出す涙。

そんな様子を見た父は僕を連れ、とある草原に赴くのが暗黙の了解のようになっていた。

そこには、樹齢数千年を越える1本桜が有った。

他には何も無かった。

大草原が広がるだけ。

父は何も言わなかったけれど。

そこに行くとなぜか落ち着いた。

涙も乾き、いつのまにかその場に有った土や草を使っては山や河を造る子供だった。

帰る頃には、泣いた事などすっかり忘れて父の肩に乗って。

そうして、僕は、ゆっくりゆっくり大人になった。

今では、父母も居ないけれど。

僕は、いろんな國に行き少しずつではあるけれど仕事をしている。

ある日、久しぶりに故郷に帰った時。

心が押し潰されるような光景を見た。

街は一掃され山河は崩れ、人々が泣き叫ぶ。

ごめんね母さん。

男の子だけど、とても現実には思えなくてボロボロ泣いたよ。

でもね、泣き腫らした目で辺りを見渡したんだ。

そしたらね、あの1本桜残ってたよ。

父さん、大丈夫だよ。

だって、この國は僕が造ったのだから。

また、涙が乾くまで少しずつ、無理せず新たな山河や街を造るから。

何年かけてでも...

今回の妖怪：だいだら法師（ダイダラボッチ）日本各地に伝承される巨人とされる。

山を運んだり、人間の助けを行うとされる伝承が多いように思える。  
また、国造りの神とも云われる。

## 鞆.1

---

かごめかごめ 籠の中の鳥は いついつ出やる 夜明けの晩に

鶴と亀が滑った 後ろの正面だあれ

「えっと、えっと。夏ちゃん」

「凄い。当たり」

旅の途中気まぐれで立ち寄った境内で思わぬ懐かしき光景に触れた。

子供達のわらべ唄。昔の遊び。全てが微笑ましく見える。

けれど、夕闇が迫り子供達は一人また一人と家路へと急ぐ。

最後まで友人を見送ったのは、先程後ろの正面で当てられた夏ちゃんという子のようだ。

仕事柄なのか、その様子が哀愁漂う夕闇に相俟って芸術的に見えた。

私は急ぎカメラを取り出しシャッターを押す。

1枚、2枚と撮っていた時。そのフレーム内に20代後半の女性が写り込んできた。

夏ちゃんの子供だろうか？不釣り合いな黒い鞆を携えたその女性は夏ちゃんに近付き、

にこやかに笑いお互い手を取り境内奥へ歩き出す。

二人の後ろ姿を眼で追っていると霧で包み込んだかのようにゆっくりと消滅した。

「えっ、何」

夢でも見ているのかと錯覚した。

慌ててカメラのメモリーを確認した。

夏ちゃんは居る。しかし、母親と想われる彼女の姿は写っていなかった。

どう説明していいか解らないまま警察に届けも出さず...

後日解った事だが、ここ1年余りで数人の子供達が消息を絶っていた。

そして、その子達は全て親から捨てられていた事実。

拾われた場所はまちまちだが、酷いものはコインロッカーやらゴミ捨て場。

明らかに小さな命を殺そうとしている。殺人じゃないか。

だからと言う訳ではない。

ただ、何か引っかかる...

私はこの事件を調べる事に決め、あの境内に何日も張り込み...

ついに彼女を見つけた。

夏ちゃんと同じように境内に一人になった子供にあの時の様に近づく彼女。

「貴女。その子をどうする気」

私は強い口調で言い放つ。

彼女がゆっくり振り向く...その刹那統べての記憶が甦る。

「お...母さん」

そう、私も実の親に捨てられた。

そして、この育て親に出会い二十歳までマヨヒガという私設で育った。

まだ幼かった私は母親にこう聞いた。

「お母さんはどうして若いままなの？ どうして鞆を何時も持っているの」と。

すると母は。

「私は、はるか昔罪を犯したの」

「つ、罪」

「ええ、我が子可愛さに人様の子を殺めた。だから人でなしな咎人...

そして、その罪を償う為に貴女達のような子を育て続けているのよ」

そう言った母は、ゆっくりと傍らの鞆を見つめ話続ける。

「この鞆は...私の命、そして貴女にとっては兄妹かな」

そう言われたものの幼い私に理解は出来なかった。

何年かして鞆を覗き見た時小さな遺骨が大切に入れられていた。

その遺骨の頭部には1本の角が生えていたのを鮮明に覚えている。

目の前にいる母は、あの頃出会ったままの綺麗な容姿。若いまま...

「その子も育てるつもりですか」

母の傍まで来ていた女の子は既に母の手をやんわりと掴んで居た。

「ええ、勿論よ。そして、貴女のように立派な大人に育てたらお終い。

これでやっと末の子に会えるの」

優しい眼差しで女の子を見やる母は何かを悟っているかのように穏やかな笑顔を見せる。

そして、ゆっくりと霧に包まれ二人は消えた。

### 鞆.3

---

それから、10年の月日が流れ、私の目の前に綺麗なままの母が現れた。

傍には小さな男の子。小さいながらもこの子があの時言っていた兄なのだろう。

「やっと会えたね。兄さん」

「貴女なら解ってくれると思っていたは。これからも世界中に貴女の兄弟がたくさん居る事を覚えておいて...人、そして妖の中にもね。もう心配はいらないわね。沙羅。さよなら」

母はその場で砂のように崩れ落ちた。

「お母さん...」

兄は驚く事無く、両手で母の亡骸となった砂を拾い上げ、あの黒い鞆へそっと詰め込むと私へと手渡した。

兄はにっこり笑うと自分の世界へと帰って行った。

私は母の鞆と共にこれからも生きていく。

世界中の兄弟と共にこの地上で...

【人でなし】とは、人なのか？人ならざる者なのか...

今回の妖怪：鬼子母神、諸説ありますが子供が五百人とも千人とも云われたが、他人の子をさらっては食べたとされる。

そして、釈迦に自分の子を隠され後に改心し神となる。





とある森に、母熊と二匹の小熊が住んでいました。  
親子熊は冬眠に備え3匹連れだって、食べ物を捜しに森の奥へと出掛けました。  
しかし、いくら歩き回っても食べ物を探しだすことが出来ませんでした。  
母熊は仕方なしに、森を抜け里山へと降り立ちました。  
そこには柿木がありました。

ほんの僅かばかり熟した柿を母熊は口でもぎ取り小熊達に与えました。  
元気いっぱい的小熊達は柿を頬張り、母熊を見詰めます。  
まだ物足りないのでしょうか。  
母熊はその様子を見て、辺りを見回し嗅覚を最大限いかし新たな食糧を捜します。  
その時、遠くからほんの少しですが美味しそうな匂いがしました。  
その匂いを頼りに母熊は歩きだし、小熊も後に続きます。  
しばらく歩いていると、地面が爪もたたない程硬くなり見た事もない風景の場所に辿り着きました。  
騒音に満ちたそこには2本足で歩く動物がたくさん居ました。  
2本足の動物は、熊親子を見て口々に奇声を発します。  
母熊は思いました。  
この動物達の縄張りに入っていたのだと...そして、後悔しました。  
小熊達を守りきれのだろうか。  
母熊は「グー」と低い唸り声をあげ、威嚇し小熊達を守りながらその場を離れようとします。  
警戒しながらゆっくりと森の方角へ戻ろうとした時...  
2本足の動物の中に、黒い長い筒を持った者が熊親子の前に立ちはだかります。

## The territory .2

---

パン

パン

渴いた音がし、次いで何か焦げたような臭いがしました。

血の臭いまでもしてきた時。

母熊が倒れ、小熊の片方も倒れていました。

残された小熊は、その光景を見て恐ろしくなり必死に逃げ出しました。

母熊も兄弟熊も目の前で殺されたのです。

あんなに、恐ろしい動物がいるとは...

残された小熊は、生まれて始めて恐怖というものを味わいました。

他動物の縄張りに入ったがためにこんな目に会った。

小熊は誓いました。

今後二度と他動物の縄張りには近付かないと...

必死に逃げながら...そう思いました。

そして、深い深い森へと小熊は逃げ帰ったのでした。

## The territory .3

---

それから、長い年月が過ぎ去り...

あの年と同じような猛暑が続いた夏も終り11月に差し掛かった頃。

あの小熊も立派に成長していました。

今年も冬眠の準備をしなければなりません。

しかし、あの恐ろしい年と同じように森の恵みはいくばくも無い状態でした。

それでも、成長した熊は木の実などを食べ我慢強く冬の訪れを待ちました。

そんなある日、道に迷ったのか2本足の動物が熊の住家に現れてしまったのです。

2本足の動物は熊を見るなり、あの時と同様に奇声を発しましたが、

成長した熊は怯える事なく堂々と立ち向かいました。

2本足の動物はひとたまりもありませんでした。

熊は久しぶりのご馳走にありつけ、なんとかこれで冬が越せる。

そう思っていました。

ですが、この2本足の仲間があの筒を持って捜しに来たのです。

その場の惨事を見た2本足の仲間は直ぐさま筒を熊に向け、

何度も何度も渴いた音を鳴らし続けました...熊の体から音と共に血が飛び散ります。

その血が、近くにあった木を紅く染め上げました。

熊は鮮血に染まるも、仁王立ちし2本足の動物に目を向け唸り声をあげ続けます。

2本足の動物は、「化け物」そう一言呟きました。

猛暑続きだったこの森の木は未だ紅葉の兆しがみえませんでした。

熊の血によって、あたかも真っ赤に染まる椀のようでした。

そして...

その後、あの熊の縄張りに近付いた者は誰ひとり戻る事はなかったそうです。

今も、これからも...

おしまい。

今回の妖怪：鬼熊は歳を経た熊が妖怪化したものだと言われる。また、人前に姿を現すことは滅多にない。

人を襲い食らうものを鬼熊とも言うそうです。